社会的ハイリスク妊産婦支援における相互信頼感形成の具体的手立て
―妊婦健康診査未受診妊産婦に対するインタビュー事例をとおして―

○　関西福祉大学　　井上　寿美（007221）
笹倉　千佳弘（就実短期大学・007988）

〔キーワード〕他者理解、エピソード、自己に言及する姿勢

１．研 究 目 的

本研究の目的は，社会的ハイリスク要因を有する妊産婦（以下では「社会的ハイリスク妊産婦」とする）支援における相互信頼感形成の具体的手立てを明らかにすることである．

近年，子ども虐待を防止する観点から，社会的ハイリスク妊産婦に対する支援が注目されるようになってきた．しかし，管見の限りでは，妊婦健診未受診妊産婦（以下では「未受診妊産婦」とする）などの社会的ハイリスク妊産婦を生活者としてとらえ，彼女たちに対する支援の具体的な手立てについて議論した研究はほとんどおこなわれていない．

未受診妊産婦などの社会的ハイリスク妊産婦に対して，生活者の視点を組み込んで調査研究に取り組んできた井上・笹倉は，未受診妊産婦支援における具体的手立ての方向性として，自己肯定感形成と相互信頼感形成が必要であることを明らかにした（井上・笹倉2013）．そこで本研究は，これら 2 つの方向性から後者の相互信頼感形成を取りあげる．なぜなら，支援者と被支援者との相互信頼感が不十分な場合，支援者と被支援者がつながり難くなるため，相互信頼感形成は，支援が被支援者にとって有効なものとなり得るための必須条件と言えるからである．

２．研究の視点および方法

相互信頼感形成の質や程度は，インタビュー場面における調査者と調査協力者のコミュニケーションの質や程度において顕著に現れるため，社会的ハイリスク妊産婦支援における相互信頼感形成の具体的手立てを検討するにあたり，社会的ハイリスク妊産婦へのインタビュー場面における，調査者と調査協力者間の相互信頼感形成過程に分析を加える．

分析にあたっては，発話内容に留まらず，関係状況の変化にも注目する．ノンバーバルコミュニケーションも視野に入れて，相互信頼感形成をめぐる質や程度に検討を加えるため，インタビュー場面を記述したエピソードを用いる．使用するエピソードは，2010 年 10 月 22 日にＡ保育所において，友人関係にある調査協力者Ｂ（Ａ保育所保護者/女性/未受診妊産婦）と調査協力者Ｃ（Ａ保育所保護者/女性），調査者２人（井上・笹倉）という構成でグループインタビューをおこなったときのものである．インタビューはＩＣレコーダーで録音し，終了後，録音資料をもとにしてエピソード記述をおこなった．

３．倫理的配慮

本研究は，関西福祉大学社会福祉学部研究倫理審査委員会に承認され，日本社会福祉学会の定める研究倫理指針を遵守しておこなった．研究結果を公表するにあたり，個人や施設が特定されるような固有名詞は，ランダムにアルファベット表記とする等，人権に対し

て配慮している．

４．研 究 結 果

以下はインタビュー場面のエピソードと分析である．

（前略）

調査協力者ＢとＣからは，常に一言，二言しか答えが返ってこなかった．彼女たちは，調査者からの問いかけに対して無言になることも多く，その場には重苦しい空気が流れ始めていた．そのような雰囲気の中で，調査者は唐突に，いま自分たちが未受診妊産婦の実態調査をおこなっているということを必死になって語り始めた．それは，ＣさんとＢさんに対して語りかけるというよりも，むしろその場の沈黙から逃れたい一心からの行動であった．

（中略）

調査者が話し終えると，その場の状況が動き出した．突然，Ｃさんが，金色に脱色された髪の毛のＢさんに向かって，「Ｂもやなぁ」と言ったのである．同時に「えっ？！」と聞き返して顔を見合わせている 2 人の調査者に向かって，Ｃさんは，「Ｂは３人目の子どもを産んだとき，妊婦健診，受けてないですよ」とぶっきらぼうに話してくれた．

（後略）

社会的ハイリスク妊産婦としての未受診妊産婦に対するインタビュー事例を検討した結果，調査者の自己に言及する姿勢が，社会的ハイリスク妊産婦支援における相互信頼感形成の具体的手立てとなることが明らかになった．

５．考　察

多くのインタビューで場面では，調査者は理解する側，調査協力者は理解される側となり，非対称的な関係が築かれやすい．このような非対称的な関係は，他者理解をめぐる抑圧性をもたらすため，調査者と調査協力者間の相互信頼感形成の可能性を低下させる．

今回，取りあげたエピソードでは，調査者が，調査協力者に対して自分の調査研究に関する話を終えた後，「その場の状況が動き出した」のである．このような変化は，発話内容によるというよりも，むしろ調査者の自己に言及する姿勢により，C さんが，調査者を理解する側に位置づけ直されたことによると言える．

以上から，調査者の自己に言及する姿勢が，調査者と調査協力者間の相互信頼感形成を促した理由は，理解する側と理解される側という非対称的な関係にゆらぎを生じさせ，他者理解をめぐる抑圧性を軽減させたからであると考えられるのである．

＊本研究は，日本学術振興会平成 22－24 年度科学研究費（研究課題番号：22500707，研究代表者：井上寿美）の助成を受けておこなった研究成果を利用したものである．

【文献】当日の配布資料に記す．